

スクールカウンセラーだより 1

スクールカウンセラーの齋藤です。昨年に引き続き丸子地区の担当になりました。宜しくお願いいたします。コロナ禍の中、皆さんのなかには様々な不安がある方もいると思いますが、子どもたちが少しでも笑顔でいられるように、サポートしていければと思います。

最初に自己紹介

2年生以上には昨年自己紹介しましたが、初めての出会いになる方もいますので自己紹介をします。

もともと小学校の教員でしたが、学校で上手く行かないことが多い子や、悩んでいる子と一緒に過ごしたり、障害がある子のクラスと一緒に学んだり、保護者と一緒に子どものことを考えたりなどの仕事を中心に活動していました。



現在は他の地域で幼稚園から大学まで関わっていますが、先生方や地域のお医者さん、福祉に関わる人、民間スタッフの仲間と共に子ども達が生き生きと生活できるための方法を考えています。

カウンセラー自身、落ち着きがないほうで、失敗も数々ありました。また、勉強も苦手でした。よく考えると、覚えることが苦手なことに気が付きました。その分、外で遊ぶのは大好きで、いつも動き回っていました。絵や工作も好きでした。今でも休みの日には絶えず動き回っています。

さて、自己紹介をするには自分の短所や長所を知らなければなりません。失敗が多かったことや、記憶が弱くて勉強が苦手だった事など自分の苦手な事や弱い部分を話すのは少し勇気がいりますね。

人は自分の短所は気が付きますが、自分の長所となるとなかなか気がつかないものです。

だけど、誰にでも長所はあり、それに気が付いたら自信をもって行動できるようになると思います。一緒に「良いところ探し」ができたらいいなと思います。



子どもたちの考えの背景は様々・・・

ある学校で「話をしっかり聞きましょう！」という課題が出ました。

A君は話し手の顔を見て、うなずきながら話を聞いていました。

B君は話を覚えようと、顔を上げずにノートにメモを取りながら聞いていました。

さて、どちらが正しいのでしょうか。一般的にはAが求められるかもしれませんが。

カウンセラーもメモを取らずに相手の顔を見て話を聞くことを教えられてきました。

でも、覚えようと一生懸命にノートをとったBも正解です。人にはそれぞれの考え方があります。大人はともすると、間違いを修正しようとしています。でもBのように理由がある場合もあります。修正をするのではなく、なぜそのような行動を選んだのかを聞いてあげ、別の考え方もあるという事を伝え、見方を広げてあげることが大切なように感じます。

Aの子はBという方法もあることを知ったほうが良いし、Bの子はAという方法もあるという事を知り、様々な考え方があることを知ることが大切になります。その考え方と違いに気が付くためにも、「私は～というような理由で～と考えた」と思いを伝えることが大切になりますね。考え方は一つではないという事です。

ただし、親として子供の話を聞くときは、「君の話を聞いているよ」というメッセージが大切になります。～しながら話を聞いたり、メモを取ったりしながら内容を分析したりするのではなく、しっかりと顔を見て聞いてあげることが大切になると思います。



多様化の時代

昨年、コロナのために学校にいけない時期がありました。そんな中で学校は ZOOM による授業など、様々な学び方を生み出しました。

今は「多様化の時代」と言われます。「多様化」とは「違い」を認め合うという事だと考えます。一人一人を大切に、学び方の違いを認め合える。様々な生き方を認め合える時代になっていくという事だと思います。

その中でポイントとなるのは相手の立場に立てる想像性と、自分の考えを持ち、自分で判断する力だと考えます。

まずは、たくさんの経験を重ね、自分で考えて行動させ、なぜそのように行動したかを確認し、それをふまえて助言していき、視野を広げてあげることが大切かなと考えます。



子供に励まされて・・・

以前、相談員として小学校に入学する準備をしていた幼稚園児と接していた時期がありました。その子は障害がある子で、たくさんの事を覚えることが苦手でした。その時期、私はいろいろあって落ち込んでいた時期でした。

そんな時に「私も小学校で頑張るから、相談員さんも頑張って・・・」と励まされた思い出があります。思わず泣きそうになりましたね。

勉強ができることも大切かもしれませんが、それ以上に大切なものは何かと考えさせられました。

障害があることゆえ、ご両親は様々な思いを持って育ててこられたと思います。大変なときもあったと思います。でも、暖かく育ててくれたんだと改めて感じました。その子もまもなく中学生になります。素敵な中学生になっていると思います。



送信の方向と受信のアンテナ・・・

子どもの発達を考えたときに、年齢によって様々な段階があります。幼児期は家族の中でしっかり愛されているという思いが中心で、そのあと友達との間で、様々な経験をし、自分はどんな特性があるのかなと考える思春期を迎えます。但し、それは人によって時期がずれてきます。みんな同じように成長していくわけではないのですが、必ずそのような時期が来ます。そこで全ての家族はどのように接していったら良いか戸惑うわけです。

特に幼児期は家族の愛情が十分に必要となるわけですが、お母さんが一生懸命に愛情を注いでいるのに子供はそれをキャッチしてくれないことも多いです。それは愛情を送信する側の周波数と受信側のアンテナの脆弱性の課題もあります。子どもはすべての信号が受信できるわけではないという事ですね。

その場合、周波数を変えてみる（愛情表現の方法を見直してみる）ことも必要ですし、もともとアンテナの向きが違うこともあります。

ある不安が強い高学年の子どもがいました。お母さんが一生懸命にはげましの言葉を投げかけていました。でも、不安はなかなか消えません。そこで、ちょっと手をつないであげたら、表情が大きく変わり、気持ちが落ち着いたようだという意見をもらったこともあります。

高学年だからという事は何もありませんね。少し信号の出し方を変えてみるのも方法かもしれませんね。

